

---

# DOG DAYS 汝等、将成滅天之『破』

空言天狐

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

DOG DAYS 汝等、将成滅天之『破』

### 【Nコード】

N4795U

### 【作者名】

空言天狐

### 【あらすじ】

タイトルはアレですが、ごく普通の小説です。過度な期待はしないでください。

ちなみにタイトルの元ネタがわかった人は挙手をお願いしますww  
ww（中国語ですよ？）

## 日常　そして非日常へ（前書き）

はい、無謀に挑んだウソツキ狐です。  
長らくのご声援ありがとうございました。

ヤバイ、ツツコミ役がないと僕の会話がない立たないよorz

## 日常　そして非日常へ

そろそろ１年が経過しようとして明日には春休みが始まる日の朝、少年は鳥の声を聴いて目が覚めた。

その少年はとても女の子らしい顔立ちで、星が光る夜空のように輝いて見える長い黒髪は少年の雰囲気にとっても似合っていた。目は母親譲りの翡翠のように鮮やかで透き通った碧眼。肌は初雪のように真っ白でうつすらと光を反射していた。

少年の名前はセイハ・アサヒナ。確実に少女が持つような名前を持ち、少女と思える容姿を持つ憐れな少年である。

ようやく目が覚めたオレは起き上がり、眠気が尾を引きながら台所に向かった。オレの両親はこの国にすらいなくて、とある場所の家を構えている。オレは幼い頃に両親から別居を言い渡されてそのまま今の場所に住んでいるのだ。

もちろん炊事洗濯も自分でやる以外に選択肢は少なく、最初の方こそ戸惑いはしたが今では２人の幼馴染とその両親のおかげでなんなくこなせる様になった。

適当に前日に仕込んでおいたキャベツを千切りにして、ご飯をよそって、卵やウィンナーをフライパンで焼いて終了だ。いただきます。

心の中でそうつぶやいてオレは朝食を食べ始めた。

「セイハ〜！　学校に行くよ〜！！」

朝食を食べ終わってから幼馴染の声が聞こえて思わず時間を確認する。

今日も時間通りなんだな

幼馴染の律義さに苦笑が浮かぶが待たせるのも悪いので急いでバッグを掴み家を出る。

「遅くなつて悪い」

オレは女幼馴染のレベッカ・アンダーソンに向かってにこやかに挨拶をした。

レベッカ・アンダーソン。同じインターナショナルスクールに通うクラスメートでセイハの数少ない友達で、茶色のセミロングをツインテールにした髪型に黒いリボン、目の色はエメラルドグリーンで、それなりに可愛いと言える容姿をしている。

お世話焼き気質でオレやオレの男幼馴染は何回もお世話になっているから頭が上がらない。まア傷なのはたまに口うるさ……

「セイハ、今何か変な事考えなかった？」

「考エテマセン。そ、それより早くアイツの家に向かおうぜ!!」

どもりながら返して急いでもう1人の方へ向かう。

レベッカはまだ不満があるようで問い詰めたような顔をしているが、オレの言葉を正論だとも思ったのかオレと同じ方向に向かう。

そしてオレの時と同じようにレベッカが声をかけて、しばらくすると高い位置からその幼馴染、シンク・イズミがバッグを持って出てきた。

シンクはそのままバッグを頭上に放り投げて

投身自

殺を図った。

普通なら慌てるどころなんだろうけど、シンクに対しては別だ。オレの考えを証明するようにシンクは道路に対してきれいな着地を決めて見せ、放り投げたはずのバッグもかつこよくキャッチする。

「お待たせ」

シンク・イズミ。イギリス英国とのハーフでボサボサした金色の髪を持ちサファイヤのような蒼く透き通った瞳をしている。柔和な顔立ちからカッコいいというよりかわいい系だが、それなりに運動神経もあるので何気に人気があったりする。

「遅いわよ」

「実際はそんなに待ってないだろ」

レベツカの言葉にツツコミを入れて、シンクは苦笑しながらオレ達の方に駆け寄ってくる。

ちゃんと来たことを確認してからオレ達は歩き出した。

「そう言えば2人は春休みどうするの？」

「僕はコーンウォールの実家で練習をするよ。両親が帰って来ないから家にいても暇だし、それに実家の方がナナミもいて丁度いいし」

「『今度こそ雪辱なるか！？』みたいな感じで？」

冗談めかしてそう言った瞬間シンクは一瞬で落ち込んでアスファルトにしゃがみ込んでの字を書き始めた。

「そりゃ僕は2位に終わったけど、何も今言わなくてもいいじゃないか……」

やばい、本格的に落ち込み始めたな。

長い付き合いからそこは一瞬で分かり、レベッカと一緒に慌てて慰める。

数か月前、シンクはアイアンアスレチックという大会に挑んで、あと数秒のところδειとこのナナミさんに敗北を喫した。けどその時のシンクはどこか天狗になっていた気がするからナナミさんに負けて丁度良かったとオレは思っていた。シンクはどこかでお調子者みたいな面があるから、オレが言っても聞きそうにないし。とにかくシンクを慰めてまた歩き始める。

「もう、セイハは余計なことを言わない！」

「悪い、シンクのことだからとつくに吹っ切ったと思ってた」

レベッカの説教に舌をペロツと出しながら悪びれた様子もなく返した。その様子でレベッカの怒りに油を十分注いだところでシンクに声をかける。

「勝負の世界なんだから誰かが負けるのは当然。良かったじゃないか。ナナミさんのお蔭でシンクはナナミさんを超えるって目標ができただろ」

レベツカに意識を奪われる前の遺言のつもりだったのだが、そう言う訳かシンクは落ち込んでいた様子を全く見せない明るい笑顔、レベツカはどこか後悔するような笑顔になった。

なんとなくその雰囲気をおかしく感じて無理やり話題を変更する。

「オレの春休みは英国に逃げる予定だ。で、数日経ってから両親に会いに行くよ」  
イギリス

その言葉にいち早く反応したのはシンクだった。

「イギリスって!! それってどこ行き!?? いつの便!??」

「今日の12:30。着陸場所は……」

「それ、僕と一緒にの便だ。それじゃ一緒に早退しよっか!!」

「そっか。分かった、じゃあ一緒に帰ろう!!」

思わぬ偶然でシンクと意気投合しているとレベツカが大きく咳払



いた。

「2人とも。息が合うのはいいけど、春休みの最後の3日間のこと、忘れてないよね？」

「忘れないよ。なんて言っただって」

「オレ達の大切な約束がある日だからな」

シンク、オレの順でレベッカの質問に返して全員で一斉に笑う。

+

+

+

+

+

そして修了式を途中で抜け出してオレとシンクは教室に一直線に走った。

「お、どうした？ 2人とも早退か？」

「飛行機的时间が迫ってきてるんですー！！」

「廊下を走ってることは見逃してくれー！！」

話しかけてきた別のクラスの先生にそう言って早々とその先生を通り過ぎる。背後から「がんばれよ」なんて声援をもらっただけだな。

そのまま自分たちのバッグを掴んで窓から飛び降りようとする時にシンクのどこか陰のある表情に気付いた。

「シンク、どうしたんだ？」

「ううん、なんでもないよ」

その表情にはどこか翳りを感じたが、無理に聞いても答えてくれないだろうと思って気付かないフリをした。

「それじゃ僕が先に行くね」

「あっ、ズルい!!」

教室の窓から文字通り飛び出したシンクを追ってオレも教室の窓から飛び出した。そのままオレとシンクは校庭にある地面に着地するはずだった。どこかの立派な剣を咥えた犬がいきなり飛び出して来なければ

犬はオレ達の着地点についた途端口に咥えた剣の剣先の向きを変えて、地面に突き刺した。その瞬間犬とオレ達の間に紫色に輝く魔法陣みたいなのが出現した。しかも魔法陣の中央は徐々に穴を広げて瞬く間に4人は楽々入りそうな大穴になった。穴は淡い緑の燐光を放つとても幻想的に見え、オレ達を吸い込む。

って吸い込んでる!!!!?????

「セイハ、助けて〜!!」

「オレの方が助けてほしいii!!」

日常　そして非日常へ（後書き）

原作と大差ねゝ　　みたいな感触が僕的能力で限界でした。本当にすみません

## 非日常の始まり

高くそびえる山が連なる場所、谷には宙に浮かぶ島があり、人が数人は乗れる程度の島同士は長い石段で繋がっていた。普段ならこの場所に住む精霊たちしかいないのだが、今日に限っては違った。フード付き外套を羽織り、フードを目深に被った少女が急いで階段を駆け抜ける。

しばらく少女が走っていると、不意に空が桜色に光って空から桜色の燐光を放つ蕾の花が降りてきた。降りてきたと使ったのはとても重力落下しているとは思えないほどゆっくりと落ちているからだ。

「はあはあはあはあ。まずい、急がないと」

わたしはそうつぶやいてさらに足を速める。

わたしが目指す場所はこの谷にある島の一番上、祭壇のある場所。そして勇者様に会える一番最初の場所。

少女は急いで石段を駆け上りながらも嬉しさを口元が緩んでいた。

+

+

+

+

+

ようやく着いたと同時に蕾の花も祭壇に着地した。同時に走ってきたせいで服装が乱れていることに気付いて慌てて身嗜みを整えた。蕾の花も空気を読んでくれたのかわたしが身嗜みを整えてから光を放って花を開く。

「ようこそフロニャルドへ、勇者さ……ま……あれ……？」

なんで2人？

横に見えるのはどこまでも澄んだ綺麗な青空とふわふわと浮かんで眠気を誘うような真っ白な雲、

下に見えるのは遠く離れた広大すぎる大地と環境問題なんて関係ないような生い茂った森林。

結論                      オレ達は今、おおそ高度12万メートルからスカイダイビングを経験しています。

「ねえねえセイハ……！」

「何だ！？」

「落ちてる……！！！」

「見れば分かる!!」

のんき過ぎる!! シンクの反応が普通なのか!!?  
元凶であるう犬の首を掴みながらシンクの言葉にツッコミを入れた。

「ねえねえセイハ!!」

「今度は何だ!?!」

「島が浮かんでいるよ!!」

「そんなの普通だ……」

ろ……………。今、コイツナンテ言ッタ?

シンクの言葉がやっと脳内に伝わって周囲を見回した。シンクの言ったとおり空中にはたくさんの島が浮いてて、とても地球とは思えない。

さっきの魔法陣から考えて魔法がある世界なんだよな……?

「着地、出来るかな?」

「現実逃避するな……!!!!」

「ワンワンッ!」

「犬も無責任なことを言うなよ!!」

何が『ちゃんと着地できるよ』だ。犬のお前に何か出来るのか？などとシンクとコントをかましているとオレ達を包む光が一際強くなり視界の全てが遮られる。ただし、犬の言うとおりだったように落下するスピードが徐々に遅くなっていくのは体感できる。

完全に止まったと感じられてから、身嗜みを整えられそうな時間が与えられてオレ達を包んでいた光は解けた。

オレ達を包んでいたのって、光の膜じゃなくて光の花だったんだな。どっちでもいいけど。

シンクが最初に見つけた女の子は、こっちを視認した途端に口を開く。

「ようこそフロニヤルドへ、勇者さ……ま……あれ……？」

女の子はそう言って停止した。  
フリーズ

何が停止の理由が分からなかったからとりあえず女の子を注視してみた。

髪は基本的にピンクで髪先だけが色素が薄くなっている。瞳は可愛いと言えるほど丸みを帯びた目付きできらきらと輝いているようにも思える。まとっている服はどこかのお姫様と言われても信じられるほど華奢なドレスで、顔も百人が百人かわいいといえるほどの超絶美少女。さらに少女の頭には可愛いとさえ思える犬耳とフリフリと動いている犬の尻尾があった。

少女の破壊力はとても強くて、下手したら発狂したモテない男達の手によって、この少女の取り合いで学園崩壊なんてありえるくらいだ。



「ねえ、セイハ。一体どうなってるの？」

「知らない。とりあえずシンクも考えてみたら？」

「う〜〜ん、分かんないや」

……さすが脳筋。すぐに思考放棄しやがったよ……。

まあかくいうオレも何か分からないので、犬耳の少女を無理やり再起動させることにした。

パンッ

少女の耳元で拍手を打つ。すると少女も意識を覚ましたようで慌てるそぶりをした。

「はっわぁ……あのその……」

「深呼吸でもして落ち着いて」

言ってから言葉が通じているのか不安になったが、その心配は無用らしく少女は深呼吸を始めた。

ようやく落ち着いたところでもう一回少女は口を開く。

「ありがとうございます。なんとか落ち着きました」

少女がぺこりと頭を下げる。変に罪悪感を感じるけど、気にしないかのようにシンクが少女に尋ねた。

「それは別にいいけど、ここはどこなの？」

「そうだな。オレも現状把握はさせてほしい」

シンクの言葉に乗っかるようにオレも少女に尋ねた。

「分かっています。歩きながらでよろしいでしょうか？」

「別にいいよ。そっちの方が時間短縮になる」

「セイハの言うとおりだね。僕も歩きながらでいい……………つて置いて行かないで！！」

「下まで競争だ！」

ちよつとうるさいシンクにそう言い残して、少女を抱えたオレは唯一あった石段を駆け下りる。

+

+

+

+

+

「なるほど。オレは巻き込まれたただけなのか」

シンクとかけっこをしながらでも説明を全部聞いて、最初に出た言葉がそれだった。

少女、ミルヒオーレ・F・ビスコティの説明はこうだった。

この世界、フロニヤルドにはいくつかの国があつて、ミルヒオーレはビスコティ共和国と言う国の領主。今ビスコティでは隣国のガレット獅子団領国と戦をしていて、今はビスコティ側が連敗している。だから次負けるとビスコティ側は城を落とされてしまうのだ。

だがガレットに勝てるほどの力はない。そこでビスコティ側では各領主しか行えない勇者召喚を実行したのだ。そこで勇者として呼ばれるのがシンクだったのだが、ちょっとした因果がオレまで巻き込まれてしまったのだ。

その説明を聞いてオレはバカだろか思つてしまふ。と言うか力で負けるなら策を練つて搦め手で倒せばいいはずだ。ちなみにそのことを言ってみたら呆れられた。

「我がフロニヤルドでは……」

ヒュ~~~~ ドンッ！！！！

オレが聞いた質問の答えを返してもらうつとしていきなり花火に遮られた。

こっちの世界にも花火なんてあるんだとか場違いな事を考えているとミルヒオーレの顔色が優れないことに気付いた。と言うか恐怖に血の気が引いてる？

「セイハ、その子の顔色が悪くない？」

「オレも今そう思っていたところ……」

「大変！！ もう始まってしまいました！！」

ミルヒオーレはオレ達の会話を遮ってそう言う。

そのままオレの腕の中でジタバタと動くので、ちょっと走るペースを遅くしてミルヒオーレを下ろした。

「大丈夫か？」

「大丈夫です。それより、早く行かないと！！」

ミルヒオーレはそう言って自分の足で石段を駆け下りていく。

そして石段を駆け降りきった場所には、純白の体にピンクの手綱、後ろに伸びたとさか、くちばしの色が黄色い二足歩行する鳥に近い

生物がいた。一瞬ミルヒオーレの命を狙っているかと思ったが、ミルヒオーレ自身が駆け寄ったことで解消された。

「ハーラン！！」

「えーっと、コレは？」

ミルヒオーレが駆け寄ったことで警戒を解いて、シンクがミルヒオーレに尋ねる。

「わたしのセルクル、ハーランです。セルクルをご存知ありませんか？」

「似たような生物なら」

「オレもそうだな」

オレの場合父さんが適当に連れて来る事があるからもしかしたらセルクルというのにも出会っているかもしれない。  
とりあえずミルヒオーレがハーランに乗り込み、シンクに手を差し出す。

「勇者様、乗ってください」

「うん。でもセイナはどうする？」

「そ、そうでした。……どうでしょう?。」

本当に無策だったようでミルヒオーレは困ったような表情をする。その表情にどこか罪悪感を感じて、オレの本当の力を少しだけ解放することを決意した。

「オレには父さんから教えてもらった体術があるから気にするな。オレは自分の足で走って行きます」

「分かりました。タツマキ、彼女を」

彼女? まさか

「あの、もしかしてオレって女の子だと思ってますか?。」

「え? 違いましたか?。」

「充分すぎるほどに。オレは生物学上れっきとした男です」

ずっと自分が勘違いし続けていたことに気付いたようでミルヒオーレは顔を真っ赤に染める。

「そ、それはスミマセンでした!!。」

「謝るのは後で良いです。それより早く城に。それじゃシンク、頼んだ」

シンクがいつもどおりお気楽そうながらも、しつかりとした表情で頷いた。ミルヒオーレもオレの言葉に押されてハーランを歩かせる。

セルクルというのはそれなりに優れた生物のようで、しばらく経った頃にはハーランの走っている姿さえ見えなくなる。

「さて。名前はタツマキで良いのか？」

「ワン！！」

タツマキは肯定するように元気よく返事をして、タツマキという名前で呼ぶことにする。

「タツマキはどこに向かう手筈か知っているの？」

「ワンッ！！」

タツマキはもう一回オレを肯定するように別の方向を向いて声を上げた。

タツマキが向いた方向には立派なお城が見える。なるほど。どうやらアレがミルヒオーレの城と言うわけか。領主

らしい大きな城だな。問題は道のりだな。正攻法じゃどう考えてもかなり疲れるし時間も掛かる。下手したら城に着くのは明日の朝なんてこともあるかも。

やっぱり普通じゃない方法を使うしかないよな。

「タツマキ、悪いけどちょっとこのバッグの中に入れて」

頼んでいるのに有無を言わせないようにタツマキの体を掴んでバッグの中に入れる。一応呼吸は出来るように頭だけはだしておいた。そのままちよつと来た道を引き戻して、助走をつける。

「父さん直伝、嵐瞬！！！」

そして           オレの世界が消えた。



## 非日常の始まり（後書き）

あんまり進んでなくてすみません。

まあ適当に次回予告を……

城で姫様を待つ騎士団と少女。先に着いたのは少女の容姿を持つ少年だった。そして、ハプリング（誤字非ず）が起こる……  
次回、フラグ……立った？

フラゲ……立てた？（前書き）

リコッタファンの皆さん、本当にすみません  
怒りは普通に作者にぶつけて構いません。批判的感想も削除する気  
はないですよ

フラゲ……立てた？

ミルヒオーレの家であり、ビスコッティ側が死守したいと思った城、フィリアンノ城の門でとある童女は啞然とした。

太陽の光をしっかりと受けたようなオレンジ色の髪で、わずかにウエーブがかかっている。瞳も髪の色とよく似たオレンジで、キラキラと光り輝いているように思えてくるぐらいだ。身長と胸は残念としか言いようがないくらい低く、下手したら8歳に見えるほど。彼女にもオレンジ色の犬耳と先が白くなった犬のしっぽを持っている。彼女の名前はリコッタ・エルマール。王立研究員首席でビスコッティの砲撃手を担っている。

リコッタの視界に移るのは青く澄んだ気持ち良い空　　ただけでなく、放物線を描きながらきれいにここに着地する黒い人型の影。

「姫様達、もう帰って来たのか」

黒い影を見つけて、騎士団の一人が小さくつぶやいた。  
「だけど影が姫様じゃないと分かったわたしは彼の言葉に首を横に振る。」

「アレは、姫様でないであります」

その瞬間ここにある空気に緊張が走った。空を飛べるのは姫様のハーランだけ。ビスコッティ側がフィリアンノ城に何かを長距離投げる必要なんてない。残された可能性は、ガレットからの襲撃。  
ミルヒオーレ

一斉に身構えて影が落ちるのを待った。

「父さん直伝！！ 鰐殺し！！」

黒い影はそう叫んだのと同時に地面に激突した

かと思えば激突した地面がいきなり泥のように変わった。

その泥はとも一瞬出来上がったように思えないほど固めの流動性を持っていて、若干……いや、とても気持ち悪かった。

「うっ、今度から使う時は考えよう……」

落下してきた黒い影ことセイハ・アサヒナは後悔するようにそうつぶやいた。今のセイハの姿は頭こそ無事に済んだものの服に関しては完全にアウトで泥塗れ、出ている肌の部分にも気持ち悪い泥がべったりと付いていた。

セイハがやったのは液状化現象と言われている事象 地震の

際に地下水位の高い砂地盤が振動により液体状になる現象を胴回し回転蹴りで振動させることで成功させたのだった。

一応は科学的に解明されている事象だが、フロニヤルドにおいてはこんな知識なんてあるはずもなくセイハの事を魔術師か魔物の類と疑って警戒をより高める。

セイハの行動によって集団の中にざわめきが走る中、リコッタが泥の淵にまで近寄って口火を切った。

「いったい何者でありますか！！ 返答次第ではただではおかないでありますよ！！」

「何者って言われても、普通の人間としか言いようがないし」

「普通の人間がいきなりこんなものを作るなんてできないでありますよ！！」

リコッタは声を荒げてそう言い放つ。

しかしそ

れが悪かった。リコッタの声で脆かった泥の淵に追い打ちがかかってしまい、バランスを崩したリコッタは正面から泥にダイブしようとしていた。

リコッタもつい驚いて手をバタバタさせるけど、無駄な抵抗に近い。

「危ないっ！！」

セイハもそれは見過ごせるはずはなく、慌ててリコッタを泥に落ちないよう支えようとした。

「あ……」

しかし何の偶然か、セイハとリコッタの唇同士が触れ合う。2人は互いに感じる温かい感触に頭の中でパニックを起こして動きを止めてしまった。

当然その様子は他の騎士に皆にも見られていて、ごく一部は頬を赤く染める。

自分達の状態に気付いてリコッタは慌ててセイハの上から立ち退いた。まあすぐにキスしたことを思い出して太陽より真紅と言えそうなほど真っ赤になった。一方のセイハも自分の体が沸騰したかのように体温が上がったのは理解できてしまった。

「……………」

2人とも気まずそうに視線を下に落として何も言わず、ただ黙る。よく見ると、リコッタの尻尾はどこか嬉しそうに左右に振れていた。

「おい、リコ。大丈夫か？」

「だ、大丈夫…夫…であります…」

ロランとは別の垂れ耳少女に聞かれて、リコッタはそのまま気を失った。その事にタツマキも気付いたのか、セイハのバッグから顔を出してリコッタを見る。

「あ、そう言えばタツマキも居たな。タツマキ、大丈夫か？」

「ワンッ」

コレは大丈夫そうだ。問題はオレのほうか……  
さっきの光景をまた思い出してしまって顔が赤くなってしまった。

「ただいま戻りました〜！　ってあれ？　なんでみなさん固まっているのですか？」

「セイハ速過ぎ。いつの間に追い抜いたの？」

幸か不幸かミルヒーレとシンクもフィリアンノ城に戻って来る。今帰ってきたことはさっきの事故は見られてないよな？

そのことを不安に感じるけど、いつまでも無視状態にいるのもなんなのでとりあえず挨拶をした。

「え〜と、お邪魔してます」

「あ、はい。　えっと思ったより速かったですね？」

そのせいで嬉しい事故がありましたけどね……

やっぱりオレも男なので、この子みたいな可愛い美少女と偶然キスすることができたのは嬉しく思っている。まああ<sup>リコッタ</sup>っちは最大の汚点とか思っているんだろうけど。

セイハは自分が嫌われていると考えてそんなことを思った。ミルヒーレは騎士団の中に流れる空気を戦への緊張と勘違いして、真剣な表情に切り替え口を開く。

「セイハさん、お願いがあります」  
「はい？」

+ + + + +

「今大変なニュースが入りました！ ミルヒオーレ姫がこの決戦に勇者召喚を使用しました！ コレはスゴイ戦場に勇者が現れるのを目にするのは私も始めてです」

実況席にいるオレンジ髪に猫耳が生えた男性、フランボワーズは興奮しながら今手に入れたニュースを読み上げる。

その興奮が戦っている人たちにも伝わったのか、戦場でも興奮したように歓声が沸きあがる。

「さあ、ビスコッティの勇者はどんな勇者だあ！！」

その報を聞き前線の茶色の髪の優男風に垂れた犬耳の男性、ローン・マルティノッジは安堵の表情を浮かべて手を止める。そしてもう一方にいる少女、エクレール・マルティノッジは驚いた表情になる。

エクレールの容姿は、緑のショートカットヘアにサファイアみたいな青く澄んだきれいな瞳、目じりはつんとがっているけど彼女の凛とした顔立ちによく似合っていて、体型もかなりスレンダー



な方だ。そして彼女にも垂れた犬耳とふさふさした犬のしっぽが生えていて可愛かった。

そのままミルヒオーレはリコッタからマイクを受け取って口を開く。

「ビスコッティの皆さん、ガレット獅子団領の皆さん、お待たせしました」

戦場では皆ミルヒオーレ姫の言葉に耳を傾け手を止める

「近頃敗戦続きの我等がビスコッティですが、そんな残念展開は今日限りにお終いです！ビスコッティに希望と勝利を齎してくれる素敵な勇者様がお仲間と共に来て下さいましたから」

映像中継用スフィアに映し出される二人の姿。

一人は外は白内は赤の外套に身を包み左手に銀の箒手をつけ、右手に白い棒を持ち、頭には青い鉢巻きを着けた金髪の少年。もう一人は動きやすさを重視したような黒のスポーツトレーナーに水色のショートパンツ、右手に銀の箒手をつけて、腰には鞘に収まった7本の刀を差している。

二人は櫓の両端に立ち背を向けているので顔は見えない。

「華麗に鮮烈に戦場に御登場頂きましょう」

花火が打ち上がり　　金髪の少年が棒を空高く投げるのを合  
図に二人は櫓から飛び降りた。

フッ

一人は投げた棒を掴むと器用に回転させそして構える。もう一人  
は一本だけ刀を抜いて体勢を低くし、刀を持っている方の手を後ろ  
に下げた構えをとる。

「姫様からのお呼びに与り勇者シンク」

「同じく剣士セイハ」

「「只今、顕参！！！」」

## 白猫との最初の出逢い

とりあえず色々あつてオレはフィリアンノ城に入つて説明を受けているシンクを待った。

若干手持ち無沙汰な面もあつて携帯ゲームを弄っていると不意にオレンジ髪に犬耳の少女が近づいてきた。セイハは今更彼女の名前を聞いていなかったことを思い出して恥ずかしそうに顔を赤くし、照れ隠しに頬を掻いた。とりあえず平静を保つて少女と目を合わせ、少女は何か言い含むように頬を上気させて視線を動かした。理由が痛いほど分かるので何も言わず、ただ少女の言葉を待つ。

そして少女は意を決したように口を開いた。

「セイハさんにお願ひがあるんであります」

「なに？」

「もし宜しければ、勇者様の初陣のサポートをお願い出来ないでありますでしょうか？」

「勇者つてシンクのことだよな。なら別に構わないけど……」

「ありがとうございます！！ では早速衣装の方を……」

「あ、それなら自前があるから大丈夫だ。後は籠手か何か用意してくればそれで」

父さん達から適当に教えてもらっていたのもあるし、イギリスで

修行のつもりでもあったからちゃんと自分の戦闘装束は持っていた。それにレベツカとの約束の日にはたぶん父さんの親友の娘、琉奈姉ちゃん達だつて来るから修行に気なんて抜けないし。

リュウナ  
琉奈姉ちゃん達も随分と強くなっているんだろぅな。

「わかりましたであります。ではルール等の説明をしておりますね。」

フロニヤルドでの戦いは真剣に戦うスポーツです。フロニヤルドではフロニヤ力チカラと言うものがありまして、フロニヤルド世界に偏在する力であります。フロニヤルド出身の人間は、フロニヤ力の働く場所においては戦いで死傷することがなくけものだまに変身するだけで済み、しばらくすればまた戦争に参加することができるであります」

つまり戦争という名目のもとの模擬戦か。練習にはかなりもってこいの場所だな。ってあれ？

疑問が思いついた瞬間またキスした時のことを思い出して顔が真っ赤に染まってしまふ。彼女にもさっきの事を考えたと分かってしまったようで、恥ずかしそうに頬を上気させてモジモジと体を動かす。その様子に可愛いと思ってしまうってさらにオレは顔を赤く染めてしまった。

「……………／／／／／／／／／／／／／／／／」

「……………あ、あの……」

「「お、お先にどうぞ（であります）」」

もう穴に埋まりたい

羞恥のせいかはたまた別の感情のせいか、とにかくそんな感情を一緒に持つているせいで言葉まで一緒に喋ってしまつて、喋れば喋るほどさらに恥ずかしさを感じる。

それでも彼女の方がモジモジとおずおずを合わせたような態度で喋りだした。

「疑問があつたら聞いてくれると良いであります／＼／＼」

「あ、ああ／＼／＼ こつちの世界じゃ老死や病死以外に死ぬことはないのか？」

「フロニヤ力はどこにでも満ちているわけではなく、当然効果が薄いところもあります。その場所ではフロニヤルド人もけものだま化することも出来ず、そのまま死ぬであります」

「そ、それじゃあさ／＼／＼／＼ フィリアンノ城ってフロニヤ力が薄いの？／＼／＼／＼」

オレがその結論に至つた理由が分かつたみたいで、彼女はさらにもうすぐ蒸発しそうなほど顔を上気させる。うう、こんな時冷静に考えてしまう自分が怨めしい……。

さらにモジモジと体を動かして、ついに意を決したように口を開いた。

「リコッタ達もけものだまになるであります。ですが、ほかの人より衝撃に強いんでありますよ」

「それだつたら戦争にならないだろ。どうやって勝敗を分けるんだ？」

どちらかというど頭脳系みたいな少女だから衝撃に強いということとは、ミルヒオーレもそれなりに衝撃に強いはずだ。

「それは互いに話し合つて決めたルールがあるでありますが、今回の戦争では互いの将を討ち取つた方が勝者であります」

今回はミルヒオーレが将つてことか。シンクのタイプそうだし、これはちよつと頑張らないとな。

「君も……」

「そういえばリコッタの名前を覚えてなかつたでありますね。リコッタの名前はリコッタ・エルマール。みんなはリコと呼ぶであります」

「リコも戦争に参加するの？」

「リコッタも参加するでありますよ。リコッタはビスコッティの砲撃手でありますから」

こんな少女まで参加しないといけないのか。じゃあオレはリコのために戦うか。

それから持つて来られた籠手に自分の持っている服を着て刀も持った。ちなみにオレが男だと分かったこともあつてリコと一悶着あつたけど、それは割愛しよう。本気で恥ずかしいから誰にも言いたくないし、オレとリコだけの秘密にしておきたい。

「それじゃあお願いしますね」

「ゆ、ゆう、勇者降臨！ここフロニヤルドで国を治める王や領主にのみ許された勇者召喚！「私も見るのは始めてです」そおおう、そんな稀少な勇者が今我々の目の前に現れましたああああ！！！」

シンクとセイハの登場により、戦場では一気に沸き上がる。

一方、フィリアンノ城では

「あの姫様あの勇者様と剣士様、こっちの戦の作法とか知らないのでありますよね。本当に大丈夫でしょうか？」

「大丈夫です。勇者様には道々お伝えしましたし、今はちゃんと口ランが確認をしてくれています」

心配そうに言うメイドに向かってミルヒオーレはみんなの不安をかき消すように笑って言った。

場所を戻してレイクフィールド内最終ステージ

「うん、ルールもルートもしっかり覚えてくれている様だね。君も大丈夫かな？」

「はい姫様が教えてくれました」

「こっちは大丈夫です」

とりあえずルールはリコッタという少女から教えてもらったからな。

またあの事を思い出して、頬が上気するのがよく分かる。教えてもらう時は互いに気まづくなったりしてちよつと時間がかかったけど、とりあえず頭には入った。

「君達は召喚されて姫様と会ってどう思った」

「可愛くて優しいそんな素敵な姫様だなんて思いました」

「それなりに良いお姫様じゃないんですか？（父さんから見たら、甘い子供だって言いそうだけど）」



オレ達は感じた印象をロランさんに言い、その言葉を聞いてロランさんはウンウンと頷いてオレ達の肩に手を置いて満足そうに口を開く。

「素晴らしい！」

その時フィールドを駆ける敵の一団が雄叫びと共に迫る

「ではお二方前に進んで先陣のエクレールと合流を！」

「はい！」「了解」

ロランさんの言葉にシンクは元気よく返事をして、オレは適当に言って互いに戦場に視線を向ける。

「シンク・イズミ……行きます」

「セイハ・アサヒナ 出る！！」

それからしばらくするとシンクが無双を決め大分先に進んでいた。

逆にオレは仲間である人達を守るように戦っているから撃破数に關しては誰よりも低い。

「は、え、えええええ！は、速い何が起こしたのかさっぱりですがこの勇者何かスゴイぞ！！そして剣士は動け！！！」

「シンクと垂れ耳少女に任せてたら大丈夫でしょ」

実況の言葉に深いため息をつきながら返して、とりあえず先陣切っている2人にも気を配りながら防衛に集中した。

基本的にこっちに前衛、と言うかシンクと垂れ耳の少女が先陣切って頑張ってくれているおかげで、こっちにくる数は少なくオレが倒すのなんてその1割くらいだ。

残りは似たような垂れ耳の男が指揮をして止めてくれている。

「シンクの奴、早く蹂躪突破してくれないかな？」

「喰らええ！グハッ」

「ご丁寧に声を出して居場所を教えてくれた敵兵を素早く切ってねこのけものだま、略してねこだまに変える。」

「一対多ってわけでもないからかなり暇だ」

自分の心情を吐露して、ほかの人に呆れられるとほぼ同時に

ドオオオオオツツン！

シンクと垂れ耳少女が放った気のような物が敵を蹴散らした。

「……この世界、父さんみたいな怪物量産機なのか？」

下手したら琉奈姉ちゃんにも匹敵しそうな気を見て思わず口に出してしまった。

オレがリコッタの近くにいたせいで、つぶやきはリコッタにも聞こえたらしく、呆れたように深いため息について聞き返してくる。

「セイハさんのお父さんって地球に住んでいるんですよね？  
なんで紋章砲を使えるんですか？」

「その質問は何とも言い辛いな。前者は正確に言うと地球には住んでいない。後者は……規格外だから？」

それにしてもあの垂れ耳少女はともかくシンクまで使えるようになるとは。これは軽く落ち込むな」

オレでもまだ気を砲撃に使うなんて高等テクニックできないのに。

「彼女の名前はエクレールでありますよ。エクレール・マルティノ

ツジ。ビスコッティ騎士団・ミルヒオーレ直属親衛隊の隊長であります」

あれで親衛隊長か。……………ちょっと暴力的すぎないか？

エクレールの容姿を見ると、珍しいぐらいの翡翠色のショートカットで、目じりはツンととがっていて気を強さを見せる。体型はかなりスレンダーで、黒いインナースーツを着込んでいてその上に隊士服を着ている。当然緑色のしっぽが生えていた。なんか胸と耳にコンプレックスを持っていそうだな。

ゴンッ

「い、痛いよ、エクレ」

「すまん。誰かに悪口を言われた気がして、無性に勇者を殴りたくなった」

「それだけで殴るの〜!!」

ド貧乳の隊長は勘も良いらしい。

とりあえずシンクがエクレールに殴られる様を楽しく静観していると、不意に殺気を感じた。殺気が向けられているシンクとエクレー

ルの2人はこの殺氣に全く気付いていないみたいで、まだじゃあっている。

「ちっ、間に合うか!!」

嵐瞬だと反動が大きいから守ることはできない。だから身を呈して守ることを諦め、刀を殺氣のする方向へ向けて投げた。

「どけ!二人共!!!」

オレの叫びでやっと自分たちに迫っていた存在に気付いた様で2人は慌てる。

しかし無慈悲にも殺氣の来ている方向から飛んで来た蒼い閃光とセイハの投げられた刀はぶつかり合って、激しい衝撃をもたらした。ほぼゼロ距離で相殺の時の衝撃を受けたシンクとエクレーは吹っ飛ばされてビスコッティ側の軍勢に落下する。

こっちに飛んで来たってことは威力はあっちの方が上だったか。さっきの攻撃にはそれなりの自信があつたのに負けるとは……ちよつとショックだな。

蒼い閃光から普通の矢に戻った矢が頬を掠めてうつすらと血を滲ませる。

だけど気を抜くことなんて出来ない。オレも咄嗟だったから全力とは言えないが、向こうだって手加減して放って来たのだ。はつきり言つて、この相手に余裕を見せて勝つなんて事は不可能だ。

「ほんのチビツと期待をして来てはみたが所詮は犬姫の手下か。ま、そちらの女子はそれなりにやるようじゃがな」

そこには黒いセルクルに跨がった白髪の美少女が見下ろしていた。年は15、6歳くらいで、絹糸のようになめらかで美しい白銀の髪、頭にはピョコツとアホ毛が生えていて瞳は宝石のように輝いて見える金色。エクレールとは正反対のグラマーな体付きで纏っているのは胸元を大きく開いた白いタンクトップに足の付け根まで見えそうな青の短いショートパンツ。その上からマント付きのジャケツトを羽織り、腰にはベルトを巻いて前開きのスカートを付けている。普通ならかなりの美少女で終わるのだが、その姿にはどこか威圧感があつて気高いプライドが感じ取れる。

「レオンミシエリ姫……」

リコのつぶやきが聞こえて思わず納得してしまった。  
なるほど。このいるだけで感じる威圧感王族だからか。…………

…ミルヒオーレとは大違いだな。

レオンミシエリ姫は持っていた弓を投げ捨てると人差し指を口の前に持っていき口を開く。

「チツチツ、姫等と気安う呼んで貰つては困るのう

我が名はレオンミシエリ・ガレット・デ・ロワ。ガレット獅子団領国の王にして百獣王の騎士」

レオンミシエリ姫がそこでいったん言葉を区切って、黒いセルクルが一步踏み出す。

レオンミシエリ姫が威張るように腕を組んで、背後に獅子を象った紋章が顕れた。同時にレオンミシエリ姫も叫ぶ。

「閣下と呼ばんか！ この無礼者があ！！！」

白き獅子姫（前書き）

セイハ無双でござリンス



## 白き獅子姫

「閣下と呼ばんか！この無礼者があ！！！」

うわあ、この距離で声が聞こえるなんてかなり大きな声だ。しかも巨乳美少女（ネコミミ尻尾付き）だし。……しかも巨乳美少女。シンクの心配する声が聞こえて、エクレールの方を向いた。

「……………ハア」

「貴様っ！今どこ見て溜め息ついたか言ってみろ！！！」

「リコッタへの侮辱とも受け取るでありますよ」

「冗談だよ。少しは空気がまぎれたでしょ」

騒ぐエクレールとにつこり笑顔で恐怖を感じさせるリコッタに向かってそう言い、ビスコッティ側の緊張を緩めさせた。

だけど緊張を緩めただけ。自称・閣下だけあって登場と同時にこっちの士気はかなり下がったな。

シンクより10枚も上手だと分かって、レオンミシエリ姫を警戒しながらも戦うために走り出す。

「ほお、面白いな貴様は、この百獣王の騎士と呼ばれるワシの咆哮を受け流すとは」

「あれって咆哮のつもりだったの？ てっきり子猫の威嚇かと思っ  
たよ。子猫姫」

近くで雷の音とか聞いたら絶対鼓膜が破れると思うよ。それに比べたら子猫姫の咆哮なんて子守唄程度だ。その気持ちで6割で、残り4割はちよつとした策略があった。ビスコッティじゃシンクを含めて誰も目の前の子猫姫に勝てそうにないから、挑発してオレが引き付けておきたかった。

オレの目論見どおりレオンミシエリ姫は激昂してくれる。

「…ッ！！ 良からう、ワシが子猫かどうか貴様に教えてくれる！！」

レオンミシエリ姫は持っていた弓を放り投げて黒いセルクルから飛び降りると、どこから出したのか分からない戦斧を片手に持つて突っ込んで来た。

「何ならその喉元を撫でてあげようか？ 子猫姫様」  
「ほざきおったなっ！」

互いの間合いに入ったと同時に、レオンミシエリ姫は戦斧を横一閃に薙いでくる。しかし重量武器の攻撃方法なんて限られているから刀の一本を楯のように構えて逸らした。

「逃がすかあああっ！！！！」

そのまま戦斧を振り下ろしてくる。その臂力は軽く驚嘆ものだが、やっぱりオレには無意味だ。

今度は戦斧を横から叩く事で軌道を逸らした。

「なっ！」

戦斧は勢いのまま地面にぶつかり、地面を砕いた。

今度はちゃんと物にぶつかったのでレオンミシエリ姫の動きが一瞬だけ鈍り、オレはその瞬間一気に仕掛ける。

「なんとということでしょうっ！ 7本の刀が同時に襲い掛かるようにレオ閣下に襲い掛かっている！！ 我等がレオ閣下が本当に子猫扱いだあ！！！」

実況席のフランボワーズの絶叫が戦場に響き渡る。

「一見貧弱そうに見える少女が、なんとレオ閣下に防戦一方を強いっている！！」

「ええ、あの剣士、セイハ君でしたか。彼女はおそらく勇者殿より荒事に馴れている様です。」

複数の武器選択は達人から見れば愚かに近い行為です。なのに7本の刀を使いこなすなんて、かなりの修練が要ったはずですよ」

神妙な面持ちでスフィアを見つめる優男風の顔に黒い服を纏った猫耳の男性、バナード將軍。

彼でもセイハの猛攻を防げる自信はなく、心からセイハを認めた。

「閣下もすっかり熱くなられて……このままだと彼女の思惑に乗せられていけませんねえ」

バナード將軍の隣で心配そうに頬に手を当てるのは猫耳の女性、ビオレ。

「おい、勇者。貴様の友人は本当に人間なのか？ それともアヤカシの類いなのか？」

目の前で繰り広げられている7本の刀の舞踊と徐々に傷を負いながらもなんとか攻撃を凌いでいるレオ閣下の戦いに視線を逸らさずエクレールはシンクに聞いた。

「人間だよ。セイハのお父さんや琉奈の両親がスゴいからセイハも鍛えられたの」

シンクはエクレールの質問に苦笑して、あきれるように答えた。

「そのお父さんとは一体何者なんだ……」

「常識が通用しないほど強くて、恐怖を食べて生きる人だって」

それは怪物、もしくは妖怪と呼ぶべきでは……？

エクレールはそう思ったが、口にした途端怖気を覚えそうな気がして口にすることはなかった。

反撃の隙間を与え無いよう密に、そして常に持つ刀を入れ替えてレオンミシエリ姫を攻撃した。

オレが多少手を抜いて戦斧の方だけを狙っていたとしても、ここまで粘られたのは父さんの関係者を除いて誰もいなかった。だからこの状況を楽しく感じてより速く、より俊敏に刀を振る。

「くっ、調子に乗るでない!!」

いきなりレオンミシエリ姫の背後に光が現れたと思った瞬間、大爆発を起こした。

攻め続けていたせいで爆発を回避することも出来ず、オレは爆炎に焼かれて飛ばされる。ただで何とか負傷は抑えられたので無様な

がらもちやんと着地できた。

イテテ。今のは一体なんだったんだ？

地面に落ちた時に頭を打ったらしくズキズキと痛むから頭をさする。しかし子猫姫レオンミシエリを挑発したオレに時間的余裕などないみたいで爆炎の中から光が漏れた。

「シャレになってない」

煙が晴れると同時に見えるレオンミシエリ姫の姿。その背中には浮かぶ淡い碧色に光り輝く紋章。

シンクの言葉や状況からそれがなんなのかは簡単に予想できるから、久しぶりに7本すべての刀を握った。

「獅子王炎陣……」

振り上げた戦斧を渾身の力で振り下ろして、地面から複数の火柱が上がる。

「大っ爆っ破っ！……！！」

レオンミシエリ姫を中心に大気が膨れ上がって激しい突風を起し、次の瞬間それらが一気に爆炎に変わる。

突風が爆炎に変わるのは予想外だったけど、爆炎を目の前にしてオレの気分は高揚する。

「面白い……紋章砲はこんな事も出来るのか……。ならッ!!」

目の前に爆炎の壁が迫るが

オレは前へ進んだ!

「決まったああああっ!!! レオ閣下の超絶紋章砲【獅子王炎陣大爆破】これをまともに受けて立つてられる者は一人もない!

ただ味方にも被害が出るのはたまに傷ですが……」

煙の中にはセイハの猛攻から二度の紋章砲を使ったこともあって息切れを起こしたレオンミシエリ姫。

「すごい、レオ閣下をあそこまで追い詰めるなんて……」

「オイ! フランボワーズ、奴はちゃんと倒れたか!？」

獅子王炎陣大爆破はかなりの輝力を使うとはいえ、レオ閣下が息切れを起こすほどではなかった。しかし現実では息切れを起こしているのだから、ビオレは感心するようにつぶやく。

一方のバナード將軍は周囲には巻き添えになった兵達の成れの果てからセイハの姿を探そうとした。獅子王炎陣大爆破がちゃんと発

動したことは確認したのは確かめたが、肝心のセイハの姿が見えない。だからこそバナード將軍は確認を求めた。

「えーっと剣士は……」

完全に煙が晴れたところでフランボワーズは身を乗り出し捜して、異変に気づいた。

師子王炎陣大爆破は放射状に広がるから範囲内はすべて焼けるはずなのに、一力所だけ地面がえぐれていない場所があった。

「な、な、何という事でしょおおおおっ！！！！ 無事です！剣士はあのレオ閣下相手に未だ無事でした！！！！」

服に少し煤がついてはいるが無傷の拳士が立っていた。

と言うかあのレオ閣下相手って。あとで半殺しにされないのか？  
まあオレが心配することでもないなと思い、セイハは深くため息をつくだけに留めた。

【朝倉流武術・秘奥義 オウガイ 黄鎧】

本来は体内で練り上げた気を全身に回して相手に突っ込む技。この技の特徴として、通常だと防げなさそうな攻撃でも無傷で済むし突進中の速度を緩めることなんてなくなる。言わば無敵のタックルだ。

ちなみに黄鎧は唯一オレがまともに使える朝倉流で、もう一つの嵐瞬はまだ反動がある。



今回は黄鎧で短く突進することでオレ自身の身を守り炎や瓦礫を防いで見せた。

「黄鎧なかったら死ぬかと思ったよ」

セイハは呆れたようにつぶやいて歩き始める。

黄鎧の防御力によってダメージは微々たるものだから走ったりするのには問題はない。

「くっ！」

ただ、レオンミシエリ姫は最後の師子王炎陣大爆破が限界だったので、身体が勝手に逃げようとする。

それを逃さない手なんてないから畳み掛けるように7刀を握ってレオンミリエリ姫との間合いを詰めて、一気に刀を振るった。防御もままならないとあって、すぐにレオンミシエリ姫の戦斧が弾かれて刀の1本がレオンミシエリ姫の喉元に突き付けられた。

「チェックメイト。ねこだま化はさせたくないんだけど、まだやる？」

「くっ、打ち負けるとは。しょうがない、ワシの負けじゃ」

レオンミシエリ姫は本当に悔しそくに降参宣言をし、周囲は一気に歓喜の声援のなかに包まれた。

七刀剣士を中心としたアホ勇者と垂れ耳親衛隊長の活躍によって  
ビスコッティ側の逆転勝利で戦は幕を閉じた。

+ + + + +

ちなみに

「おい聞いているのかアホ勇者！！！！」

オレがシンクの元へ戻ると、外套をバスタオルのように巻いたエクレールから説教を受けているシンクを発見した。

戦闘中はかなり息が合っていると思っていたのでなんで怒られているのか疑問に思っているとリコッタが助け船をくれた。

「実は、エクレが放送されている最中に勇者殿が力加減間違えてエクレの服を脱がしたのであります」

……シンクのバカ。レベッカが聞いたら雷じゃ済まないだろ。  
シンクの行動に呆れていたが、いきなりリコッタにキスした自分も同罪だと思いつことはなかった。

「そう言えばまだ子猫姫って呼んだこと謝罪してなかったな」

帰れないか。……父さん達に救援を頼もうかな？（前書き）

多分原作と大差ないはず

帰れないか。……父さん達に救援を頼もうかな？

貧乳隊長……訂正、エクレールからの説教が終わった後、シンクの言った一言で改めて状況を再把握する羽目になった。  
その一言とは

「あゝそろそろ一度家に帰るなり連絡なりしたいんだけど……」

そうだよな、オレもずっとこっちにいるのはまずいし、なんとかして向こうへ帰らないと。

「あつ、そうですね。 リコ、勇者様を帰す時は一体どのようにすれば……」

ミルヒオーレ

姫様が聞いた瞬間空気が凍った。まるで聞いてはいけないような事を聞かれたような。 そんな状況に疑問符を浮かべているのは聞いた本人、リコッタ、オレとシンクの4人。

凍りついた空気の中、沈黙を破ったのはエクレールだった。

「あの、姫様、地球人を帰す方法なんて存在しません」

ナンデスト………帰す方法が………無い………？

[illegible]

「うう、本当にすみません」

「いざとなったらオレが父さんに頼めば良いから気にしないで」

謝罪するミルヒオーレとリコを尻目にオレが慰める。

シンクは帰れないってわかってキノコが生えそうなほどジメジメした暗い雰囲気を出している。

「ところでエクレール、物は相談なんだけどシンクを慰めて、城下を案内してくれない？」

「城下を案内するのは別に構わない。だが、アレを慰めるのはゴメンだ」

あ、やっぱし？ オレも今のシンクには関わりたくないもんな。

「ところでセイハさんは……」

「普通にセイハって呼び捨てで良いよ。特に……その……アレがあったし……／＼／＼／＼」

また出合った時の事件を思い出して恥ずかしくなってきた。  
思わず顔をまた上気させて、リコと一緒に気まずい雰囲気を出してしまう。

「セイハは城下を案内してもらわなくて良いでありますか？／＼／＼／＼」

「ああ、オレはガレットの方に行くから。ほら、オレって向こうの姫様を子猫姫って呼んでたから、その事を謝りたくてね」

「そうだな、さっさと謝りに行かないと不敬罪で捕まるかもしれん」

「あのさ、エクレール、一応オレも不安なんだから更に不安になりそうなこと言わないで」

「自業自得だ。それと、私もセイハと呼ぶからエクレーで良いぞ」

うう、胸がない＝冷たいっていう法則はあってるのか？  
心の中で泣いていると、なぜかエクレーはシンクに近付いて頭を思いつき殴った。

「アイタッ!!」

「すまん、なんか無性に勇者を殴りたくなった」

まさかオレが余計な事考えたせいかな？じゃあもつと考えておこう。  
……って余計なことは良いな。

「でもあとで迷子になられても困るでありますから、先に城下を案内するであります」

「確かにそれは困る。じゃあ謝るのは後にするか」

リコに説得をされ、オレはシンクを引き摺ってリコとエクレに道案内をしてもらった。

……一瞬Wデートなんて思ったのは、墓場まで持っていくことにしよう。

そして出かける時に最悪なことに気付いた。

「あつ、オレ達こっちのお金持っていない」

「ああ、そのことか。それなら安心しろ。お前達はそれなりに活躍したから報奨金がちゃんと出てる。ほら、これがお前たちの分だ」

エクレはそう言ってオレ達に袋を一つずつ押し付けた。



心なしかオレの持っている方の報奨金が大きく見える。撃破数はシंकの方が2473人で、オレが子猫姫含めて163人。圧倒的に少ないからオレの方が少ないと思うんだけど。

子猫姫と戦っている間でもちゃんと数えていたからこの数に大幅な間違いはないはずだが。

「へえ、戦にちゃんと報奨金がでるんだね」

「みたいだな。で、エクレは間違つて渡したみたいだから交換しておこ」

「別に間違つてなんかないぞ。貴様は一人でレオンミシエリ姫を倒したからな。その分倒した数が少なくても色がついてるのだ」

あゝ、納得。確かに敵の総大将を倒した奴に色をつけるのは当然か。

「それに、貴様等の帰還に関してはリコが動いてくれているんだ心配するな」

「そうでありますよ。ちゃんとリコッタが帰る方法を見つけ出すでありますから」

「そうか。じゃ、とりあえず露店でも冷やかしながら案内してもらおうかな」

すると先程まで俯いて何か呟いていたシンクが顔上げて急に元気になった。

「うん帰るまでは勇者として皆をしょんぼりさせない為に出来る事を頑張ってみるよ」

どうやら持ち前のポジティブ思考で持ち直したらしい。脳筋らしくて良いと思ったが、まあみんなの士気に繋がるのも確かなので下手にからかうことはしない。

でも気張るのも疲れそうなのでシンクに一言言った。

「あんまり頑張りすぎてぶっ倒れるなよ。たまには自分の弱いところもオレやエクレには見せる」

「えー、エクレは…何でもありません！頼りにしてるから！！」

「優しいねえ垂れ耳は……」

不満そうに言っていたシンクだったが、エクレが手に光を灯した途端態度を変えた。

その平和で微笑ましい光景に思わず笑みがこぼれて一言呟いてしまった。オレの独り言が聞こえなかったらよかったのだが、垂れ耳とは言え犬の耳であることに変わりはないらしく結構聞こえが良かったみたいだ。

「き、きき、貴様は突然何を言い出すんだっ!？」

顔を真っ赤にしてオレを指す。それだけなら大変可愛らしい動作だろうが、エクレは前動作で手に持っていた5本の串を人に向かって投擲したやがったのだ。

その攻撃に命の危険を感じて刀を抜き、5本とも撃墜する。

「アブな、オレじゃなかったら普通に刺さってたよ」

「うるさいっ! 貴様が急におかしなことを言うからだ!！」

えゝ、本音を言っただけなのに。

他人の弱音なんて深く関わりたいと思わなかったら聞きたいなんて思わない。更に言えば弱音を聞くのなんてその人をちゃんと支えたいと考えてなかったらやらない行為だ。

シンクに特別な思いを抱いているのかとからかったら、烈空十文字が飛んできた。まあ今度からこのネタでからかうのはやめるか。そんな事を考えていると不意にリコが口を開いた。

「セイハは誰か特別な人っているのですか？」

「オレ? んゝ、どうだろ? 特別な人って言うたら琉奈姉ちゃんかな」

あの人は一応オレの初恋の人だったしね。勝負では1回も容赦を

しない人だけど、基本的に優しいし美人だし護りたいって思える人だし。

ここにはいない人の事に思いをはせていると、リコに元気がなくなったような気がした。一瞬気のせいかと思っただけど、どうやら気のせいじゃないみたいでリコの視線も下を向いている。リコに落ち込まれるのはちょっと辛く感じるから慰めるようにリコの頭を撫でる。

「ま、リコもオレの特別な人だよ」

「あつ、嬉しいであります／＼」

一瞬でリコの表情は明るくなって、そんなリコの表情を見ているオレも嬉しくなった。

「それと、オレ達を帰す方法だけど、ホントに気張らなくて良いからね。オレの父さんに頼めば何とかなると思うから」

まああの人だったら何とかなるどころかこの世界を覆しかねないけど。

適当に道端で買った焼き鳥みたいなのに齧り付いてオレの父さんの事に思いをはせた。

「セイハのお父様ってどんな方なんでしょうか？」

「常識外。その一言で察して」

オレはあの人以上の常識外を知らないからその一言でどんなに危険な人が察して欲しかった。

リコは半分くらい分かりながらもオレの呆れを察してそれ以上話題にしようもしない。

「ところでセイハ、ベツキーのことどうする？ 流石に僕達2人が同時に消えたんじゃない心配すると思うけど」

あゝ、ここって携帯が使えないもんな。オレのも普通に圏外だし。オレが普段使っている携帯を改めて確認してみたけど、やっぱり画面には圏外の文字が表示されていた。お陰でモバゲーでも遊べそうにない。戦国 レク ヨンは面白いイベント中だったんだけどねエ。

「とりあえず、電波がある場所を探したら充分だろ。リコ、この近くで電波がありそうな場所って知ってる？」

「でん、ぱ？」

リコに質問すると首を傾げられた。どうやらフロニヤルドには電波はないらしい。

+

+

+

+

+

とりあえずオレ達が最初に来た場所に向かって、地球から電波が漏れてないか確認してみたところ予想通りに電波はなかった。

ここら辺でもう1つの携帯について教えようとしたところで、アンテナが付いた中継車みたいな物をセルクルに牽いてもらっているリコとエクレが到着した。

「リコ、それ何？」

「これはですね、フロニヤルドの映像中継所であります！」

リコは小さい絶壁……訂正、小さい体を反らして自慢するように言った。

そのままリコは「まあ見てくださいであります」と言って機械のレバーを下ろす。機械は駆動音を発して、アンテナの部分は発光を始める。その瞬間携帯が僅かに振動して、電波を受け取ったことを教えてくれた。

「へえ、このアンテナが中継所の役割をしてくれるから携帯が使えるようになるんだな」

その言葉にシンクは慌てて自分の携帯を確認し、笑顔になった。

「繋がった！！ 凄い！凄い！リコ！！」

そのままシンクはベッキーに電話をかけて、オレは戦国 レク  
ヨンを始める。

不意にリコがオレの方、いやオレの携帯を見ていることに気付いた。

「携帯電話に興味あるのか？」

「はい！自分は見たことのない装置や技術を見ると研究心と尻尾の  
付け根がきゅきゅうとなるのでありますよ！」

凄いくらいに眼を輝かせて力説された。 ま、モバゲーなんてゲ  
ームデータを移せばどうにかなるか。

適当にモバゲーのゲームデータを保存して会社に情報を留めてお  
き、オレのアカウントを全て消した。 ついでに個人情報になりそう  
なデータも消去して、リコに渡す。

「はい、興味あるならあげる」

「え？ でも……」

「別に今すぐ必要って訳でもないし、地球に戻れば新しいのを買え  
る。」

それに、携帯電話はもう1つ持ってるんだ」

父さんから貰った携帯を見せてリコの気持ちを後押しする。

ちなみにこの携帯に関しては失くしたら文字通り父さんに半殺しにされるから渡すことなんて絶対出来ない。

そして携帯と一緒になっている物もリコに渡した。

「コレは何でありますか？ 何かのコードでありますか？」

「充電器って言って、携帯の動力源となる電気を補充する為の物だよ。携帯にしか使えないからついでにあげる」

「ありがとうございます。戻ったらその携帯電話？と充電器？をバラしてみます」

満面の笑顔を浮かべるリコを尻目に、フロニヤ周波増幅機という、リコが5歳のときに作った機械の画面に向かって何か話をしている。その高性能さにはテレビ電話と単語がよぎったが、今は関係ないだろう。

今まで落ち着いて話をしていたエクレのテンションがいきなり上がって、立ち上がると同時に大声を上げた。

「それは本当ですか！」

「エクレ何かあったでありますか？」

「ダルキアン卿と我らの親友ユキカゼが今日明日には帰ってくるぞうだ！」

「ユッキーが帰ってくるでありますか！」



エクレの報告が嬉しかったのかリコのテンションも上がった。

「ダルキアン卿とユキカゼ……？」

「あつ、セイハ達は知らないでありますね。

ダルキアン卿はビスコッティ最強の騎士にして隠密部隊の頭目、  
ユッキーは私達の親友で隠密部隊の筆頭なんでありますよ」

隠密って……。どこかの国をスパイしていたのかよ。いや、でも、  
フロニヤルドの風習から見てかなり異常だよな。なんで隠密なんて  
……いや、違う、誰にも秘密で何かを遂げていたって事か？

隠密と言う言葉に頭を悩ませて、結局分らないことなんだから  
考えるのを放棄した。シンクに脳筋って言うておきながら、オレも  
大概脳筋だよな。

ひとまずオレは先延ばしにしていたガレット行きをこのまま決行  
してリコ達とは別れた。

帰れないか。……父さん達に救援を頼もうかな？（後書き）

今更だけど、謝罪を後にするのは人間としてどうだろうか？

ちなみに作者は戦国 レク ヨンが好きです。一番のお気に入り  
は「刀斬双神」石舟斎です

ガレット獅子団領国不法侵入！！ セイハ、一回O H A N A S H I I するぞ

サブタイの一言はリコッタ・エルマール嬢ですww

ガレット獅子団領国不法侵入！！ セイハ、一回 O H A N A S H I するぞ

ガレットにある城の一室で白銀の髪を持つ少女、レオンミシエリ・ガレット・デ・ロワは頭を抱えて悩んでいた。

少女の前にあるのは一つの鏡。しかし移しているのは少女の姿ではなく、別の人物達の姿だった。

「なぜじゃ！ なぜ変わらん！ 良くなるどころか、さらに悪くなつとるではないか」

なぜ、これだけ全力を尽くしても……変わらんのだ。

自分の無力さにレオンミシエリ姫は気付かないうちに涙を流した。どれほど自分の心を殺しても、鏡に映る光景は変わらない。かと言って鏡に映る光景は絶対に認めたくないから受け入れる気もなかった。

そんな中、不意にレオンミシエリ姫の部屋の中で音が聞こえた。反射的に振り向いて、ありえない人物を見る。

「セイハだったか？ なぜここにいる？」

「戦の時に子猫姫って呼んだ事を謝ろうかと思って。それより……」

セイハは一旦そこで区切って荒ぶる気持ちを抑えながら怒鳴った。

「それはいったいどういう事だ！！」

レオンミシエリ姫もセイハの視線の先に気付いて何も言わない。  
鏡に映っている姿は、たとえ悪戯でも許される行為ではない。だからこそレオンミシエリ姫の弁明が聞きたかった。

「……誰にも言わぬと約束せい」  
「内容による。そんな、非道なことをしておいて、オレに黙らせるほどの理由があるなら」

この言葉は嘘だ。本当は全員に言い触らすつもりだ。

それでもレオンミシエリ姫はあきらめるように苦笑を浮かべて、すべてを語った。本当に、鏡が何の効果を持つに至るまで。その深刻さに思わずセイハも息をのみ、荒れていた気持ちもかなり凪いだ。この話を言い触らす気でもあったのに、今ではそんな事を考える勇氣もない。

むしろ半年間も自分の心を殺し続けた少女に尊敬の念を抱いた。

「なあ、オレをガレットに入れてくれないか？」

「どう言うつつもりじゃ？」

「オレだってこんな光景は見たくないから。それに、レオン閣下を影から支えたいと思ってね」

思ったことを口にするとなんかレオンミシエリ姫に呆れられた。

「貴様は阿呆か。貴様はビスコッティに召喚された身であろう」

「ん？ 単にシンクに巻き込まれただけらしいからどっちに就く  
うと関係ないと思うけどね」

「じゃが。ほかの奴等からは“裏切り者”と罵られるぞ」

「それが？ オレ自身が後悔しないためにした行動であることに間違いないから、誰になんて言われてもオレは気にしない。むしろ  
それだけオレは自分を貫いたってことだろ」

『誰かに指図されて生きるんじゃない。自分が自分であるために  
生きるんだ』

オレはこの言葉を父さんから聞いて、共感した。自分で生きるの  
は難しいけど、誰かの色に染まったらそれは自分じゃなくなる。ま  
あ自分から染まりに行くのは道を探すのにちょうどいいからやれと  
も言われているけど。

「……お主は本当にアホウじゃ」

「いきなり侮辱って人間としてどうよ？」

「じゃが、ワシはお主のバカさを気に入った！！ 手を、貸しては  
くれまいか？」

どこか切なさが混じった表情をしながらレオンミシエリ姫は手を  
差し出す。

オレはその手を掴んで、握り返した。

「こっちこそ、協力させてくれてありがとう」

オレ達は1つの目的の元、ここに協力関係を結んだ。

「レオ閣下！大変です！！ ガウル殿下がゴドウィンとジェノワーズを連れて戦を仕掛け……で、敵襲！！敵襲！！ レオ閣下の私室に剣士が忍び込んでます！！」

「いや、ガレットはビスコッティ以上に面白そうだな」  
「まったく、頭が痛くなってくるわ」

いきなりレオンミシエリ姫の私室に入ってきたビオレはパニックを起こしてアタフタとする。

感心するようにつぶやくオレをしり目に、レオンミシエリ姫は頭を悩ませるように苦い顔をして額に手を置いた。

レオンミシエリ姫の様子にちよつと悪戯心が刺激されて遊んでみることにした。

誰が見ても悩ましいと分かるけど、あえてとぼけてレオンミシエリ姫の顔にオレの顔を近づける。

「熱でもあるのか？」

「「なっ！！！！」」

本当に間近で見ることになったレオンミシエリ姫は一瞬で真っ赤に染まり、ビオレの方も恥ずかしさと怒りで顔を真っ赤にした。

あら、レオンミシエリ姫って意外と純情？

「レ、レオ閣下にキスするなんて!!」

「へ？ いや、今回はしてないからな」

「今回は!？ ってことは前にしたんですね!!」

いや、リコにとって意味だったんだけど通じてないよね？

どこから取り出したのかビオレはレイピアを振り下ろしてくる。

咄嗟に刀を抜く反応をして、刀を持ってきてないことを思い出し慌てて避けた。今の軌道は避けてなかったら脳天直撃コースだったと思う。

「ちょっと!! オレそんなの喰らったら本気で死ぬよ!!」

「レオ閣下を穢した罪は重いですからそう簡単には死なせません!!」

「別に穢してない!! キスだって誤解だからな!!」

「問答無用!!!!」

問答無用って本気で聞く気ないんだな!!？

ビオレの攻撃を何回も避けていたが、最後に足を引っ掛けて転んでしまった。好機と見たビオレは目を光らせてレイピアを振り下ろす。しかし



「ビオレ、止めんか！」

レオンミシエリ姫がいつの間にか持っていたあの戦斧でレイピアを受け止めてくれた。

「でもレオ閣下、不法侵入の上レオ閣下の唇を奪ったんですよ」

「別に奪われておらんぞ。ビオレの勘違いじゃ」

「え？ あ！そうだったんですか！！そ、それは本当にすみません！！」

「別にいいよ。オレがレオンミシエリ姫をからかってみようって思ったのが原因だったし」

ようやく沈静化すると思ったけど、レオンミシエリ姫はオレの言葉が気に入らなかったみたいで静かに怒気を発した。

「ほう、ワシをからかうつもりじゃったのか」

「あ、あははは」

ヤバイ、乾いた笑いしか出てこない……ここは逃げるあるのみ！！

「逃がすか！！」

オレの逃走を阻止するかにようにレオンミシエリ姫も追いかけて来た。ここで包丁なんか投げてきたら139歳の医者そっくりなのだが、さすがにそんなことはなかった。

その後、バナードとビオレの仲裁によってオレとレオンミシエリ姫の鬼ごっこは止められた。

「ふう、余計な時間を使った」  
「誰が原因じゃ」

疲れを込めたため息をつく。レオンミシエリ姫に睨まれた。

「オレが悪かったってば。今夜はミルヒオーレ姫のコンサートらしいから……」

早めに終わらせて帰らせたい、と続けるつもりだったのだが、なぜかその場にいた全員が固まった。

……あゝ、知らなかったのか？

心情がよく分かり、シンクへの怒りが増した。ん？なんでシンクに怒ってるかって？フロニヤルドでの戦は遊びなんだから相手の配慮をしないわけがない。つまり“戦に待ったをかけることができる”事を知らず、あえてガレットの挑戦を受けるバカがいるって事だ。フロニヤルド人がこのルールを知らないはずもなく、当然容疑者は地球人<sup>シンク</sup>以外除外されるわけだ。

あのバカ、どうやってお仕置きしよう？

「みんなはヴァンネット城に残れ。私1人の方がやり易かるう」  
「オレも行くよ。アホ勇者に1発入れないと気がすまない」

全員同意見みたいで苦笑を浮かべている。まあこんな事で時間をとるのも問題なので急いでレオンミシエリ姫を抱えた。

運びやすいようにお姫様抱っこだ！！ 背負うなんてしたら胸が背中<sup>シンク</sup>に当たるから却下。文句あるか！！

「貴様！いきなり何を！」  
「黙って、舌噛む」

一言だけ喋ってオレは走り出した。相対的にビオレとバナードの姿がどんどん後ろに下がっていく。

「セルクルより、速いじゃと」  
「誰か1人を抱えているときだけな」

琉奈姉に『男の子なんだから女の子1人を抱えてでも走れるようにならないとね』と言われてほぼ死ぬ気でがんばった。お陰で誰かを抱えていた方が速くなってしまったのだ。

これはオレの黒歴史であるから、誰にも言わないことを星に誓ったケド。

「そうか。細い体なのに意外とたくましいようじゃな」

うつ、間近で言われると何か来るものがあるな。

懦弱と思われていた事に心の中で泣いて、それでも走る足を緩め  
なかつた。……………

そう言えば行く場所ってどこ？

ガレット獅子団領国不法侵入！！ セイハ、一回 O H A N A S H I するぞ

まず最初に、最初が犯罪で始まってスミマセン。

レオンミシエリ姫の目的を知るにはこの展開の方がいいと思ったんです。それに、セイハには最初ッからビスコッティに召喚されてガレットに協力するという異端をやって欲しかったというものありますし。

そして D O G D A Y S を知っている人に言っておきます。

星詠み  
鏡の内容はさらに悲惨なものに変貌してますから悪しからず

神剣エクスマキナ セイハはリコ達を見捨てるでありますか……？（前書き）

サブタイの一言はまたしてもリコッタ・エルマール嬢

半泣き状態で言われたら罪悪感がナイアガラの滝のごとく降ってきて

そうですww

神剣エクスマキナ　セイハはリコ達を見捨てるでありますか……？

そのままレオンミシエリ姫に道案内してもらいながら抱えて走っている、城が見えてきた。

門の上には狐らしき金髪少女と　出会いたくなかった少女がいた。自分が悪いのは分かっているけど、なんとなく顔を合わせたくなくて顔を下に向けながら城の中に入った。

中には超　筋肉な猫耳大男とこげ茶色の髪の中性的な人がいた。かろうじて胸が膨らんでいるから女性なのだろう。

もう走る意味もないのでレオンミシエリ姫を下ろしてから、従うようにレオンミシエリ姫の後ろに下がる。

「これはこれは。レオンミシエリ閣下自ら御出陣とは。　お元気そうで何よりでござる。」

「お世辞はよい。それより、そこを退け」

「それは出来ぬ相談でござるな。拙者は足止め役としてここにいるでござる。通りたくば、拙者を倒すでござるよ」

中性的な女性はそう言つて刀を構える。輝力を纏い出したのか刀の刃には紫色の光があつた。

表情にもとばけたような笑顔の中に真剣なものが宿っている。

「なら力づくで押し通るよ」

前に進もうとしたレオンミシエリ姫を制して、戦槍を握り中性的

な女性と相対する。

この戦槍はレオンミシエリ姫に七刀を持ってきてないって言ったらプリプリと怒りながらも貸してくれた代物だ。

「ほう、ガレットも勇者を召喚したのでござるか。しかも持っているものは聖剣エクスマキナとは。国の宝剣と戦うことができるとは、とても面白そうでござるな」

言葉通り楽しそうに中性的な女性は笑った。しかし目は笑っておらず、むしろ逆に真剣になったといった感じだ。

……ところで国の宝剣って。この戦槍ってもしかしてかなり貴重かつ重要な物？

レオンミシエリ姫から普通に手渡されたのであんまり気にしてなかったのだが、シンクの事から考えると背筋にかなり寒いものがあった。

「そう言えば名前を聞いてなかったね。オレはセイハ・アサヒナ。そっちは？」

「ビスコッティ騎士団、オンミツ部隊の頭領、ブリオッシュ・ダルキアンでござる」

あゝ、そう言えばリコとエクレがユキカゼ達が戻ってくるって喜んでたっけ？

リコ達の話をおさりと忘れていたことに苦笑を浮かべる。それはさておきオレと中性的な女性の間に緊迫した空気が張られ、沈黙のヴェールが下された。しかし沈黙を破ったのは粗野な男の声だっ



た。

「貴様はビスコッティ側の勇者であろう！なぜに我が国の宝剣を持つておるのだ！！」

「な！！」

「ワシがセイハに託したのじゃ。何か文句があるのか、ゴドウィン？」

超 筋肉な猫耳大男（ゴドウィンと言らしい）の言葉にダルキアン卿は驚き、レオンミシエリ姫は何事もないかのように淡々と言い放った。

隙を突くのも嫌だが、時間がないのも確かなので一気に聖剣エクスマキナで突く。

直前で自分を取り戻したダルキアン卿はとっさに右に避けた。元々避けられる前提でやっていたからショックなんてないまま、聖剣エクスマキナを振り下ろす。

だがオレの振り下ろした聖剣エクスマキナは地面と平行に向けられた刀によって受け止められた。予想は外れたけど、これで大丈夫だ。

「なかなか鋭い一撃でござるな」

「レオン閣下、今のうちに通り抜けて」

感心するように言うダルキアン卿と鏖迫り合いになりながらレオンミシエリ姫に言い放つ。

別に倒さずとも足止め役の動きを封じればレオンミシエリ姫たち

を中に入れることが出来るので倒す必要はない。考えられなかった方法に言われたレオンミシエリ姫とゴドウィンは戸惑いながらも砦の奥へ進んだ。

ダルキアン卿もそれなりに抵抗しようとしたが、下手にバランスを崩すと痛い反撃が来ると分かったみたいで諦めたようなため息をつかれた。

「拙者の負けでござるな。この負け方は意外とショックでござる」  
「無駄な争いはないに限るからね。真剣勝負だったら負けてたかも」

ダルキアン卿が手加減していたのはかなり分かった。オレも応えるように手加減していたけど、それでも半分くらい全力だった。対してダルキアン卿はおそらく2割ぐらい。  
まるで勝負になってない。

「こんな反則な決闘に終わって悪い。だけどオレ達には絶対に引けない事情があるんだ」

「そんなに焦っておったらいずれ大きな失敗を犯すでござるよ。ビーチバレーやら芋掘りなどして気持ちに余裕を持つでござる」

「……それって姫様の奇行興業のことを言ってるの？」

全身の力が抜けそうなくらい脱力して、深い呆れの溜息と同時に口に出てしまった。ミオン砦に来る最中にレオンミシエリ姫からこれまでの奇行興業のことを聞いて、思わず呆れが出てしまった。

一方でオレの奇行呼ばわりにダルキアン卿も無邪気な笑顔を浮かべて笑っている。

「ダルクアン卿、1つだけ質問。輝力つて戦興行には必要？」

「不必要とも言える……でござるが、輝力を使う相手と戦う時は必要でござるな」

「そうか、ならレオン閣下に教えてもらおう」

とりあえず今は力が欲しいので輝力を覚えることを決めた。次の瞬間考えていることが真っ白になるとも知らずに。

「ならこちらからも質問であります」

少女らしい幼さを残した凜とした声。その声が聞こえた瞬間体が強張ったのが分かる。

この皆にすることは分かったから覚悟はしていた”つもり”だったが、どうやら本当に”つもり”だけみたいだ。全身の筋肉が固まったように動かしづらく、心臓の音も彼女の声を聞いた瞬間強く脈を打った。強張る体を無理やり動かして、オレンジ色の髪を持つ小さな少女の方を向いた。

「どうして、ガレットの宝剣を持っているんですか？」

「レオン閣下から貸してもらった」

異世界の人間とは言え、簡単に国の宝剣を貸与するはずがない。それは当然の事で、リコッタの質問の意味とは天と地ほど違ってい

る。

オレ自身答えが違っていると分かる。だけど、どうしても気持ちに整理をつける時間が欲しかったから誤魔化した。しかし誤魔化しがいつまでも通用するはずもなく、誤魔化すだけ真実を話した時にリコを悲しませるのは目に見えているから、気持ちに整理をつけると同時に裏切りの言葉を言い放った。

「……オレは今日からガレットに味方する。もうリコ達とは敵同士だ」

そう言った瞬間リコの顔色が目に見えて白くなった。同時に自分の失敗も悟ってしまう。

何で気付かなかったんだよ、気持ちの整理が必要なのはオレじゃなくてリコの方だって

自分の浅慮に後悔して、それでもガレットに味方するという気持ちに変えなかった。関わってほしくないって言うのがオレの願望であり、ついでに言えばこの程度で揺らぐような意志ならオレを信頼してくれたレオンミシエリ姫の侮辱になる。

投げられた賽は決して目を変えないのだから、後は出た目に従って突っ走るのみだ。

「バカ共がアアアア!!」

天を劈くような怒声がいきなり響いて思わず耳を塞ぐ。声はレオンミシエリ姫のものとかかって停戦が決まったと理解しレオンミシエリ姫の居場所に向かった。

「下ろしてであります!!! / / /」

あつ、リコを抱えて来ちゃった。……まあいいか。

無意識に抱えていたリコの言葉に自分の心だけで自己完結した。ただ、落とさないようにとリコの小さい体を強く抱きしめておく。

セイハはリコの体を強く抱きしめたせいかリコの体温をさっきより温かく感じている。ちなみにセイハは気付いてないがリコの顔はかなり蕩けてる。

レオンミシエリ姫の気配を追って皆の1番豪華な部屋に入って、どんな状況が困惑した。

シンクと白銀の髪の少年は頭にたんこぶをつけて正座し、猫耳を生やした少女2人と兎耳の少女は3人まとめて縛られていて、誘拐したミルヒオーレはレオンミシエリ姫と話しながら足元にいる子ライオン?と戯れている。

「あつ、セイハ。今来たの?」

「今来たの?……じゃねえ!!」

「イッタァ!!」

リコを抱えたままシンクの頭にかかと落としを食らわせる。シンクは激痛から頭を抱えて転げ回り、ミルヒオーレと銀髪少年は戸惑いの表情を、レオンミシエリ姫は満足そうな表情を浮かべた。

ってシンクにばかり構ってる場合じゃないよな。

「ミルヒオーレ、コンサートの時間って何時!？」

「夜8時からです」

「今7時半だから……あと30分!？」

オレの足でもビスコッティに行くのに1時間かかる。急げば何とかなると思っていた自分が恥ずかしくなった。と言うかこんな事態にさせたシンクに怒りが募る。ただ怒りをぶつけるのは時間の無駄だから、怒りの感情は飲み込んだ。

「リコ、あと30分で向こうに着く手立てってある!？」

「さすがに無理であります! リコは青狸ではないのでありますよ! ! ! !」

なんで某ネコロボットを知っているのか気になったが、とりあえずリコにも無理だと分かったので何も言う事はしなかった。

ただビスコッティにいる人々の期待を裏切れることは、僅かながらビスコッティの結束にヒビを入れる行為なので、その事を理解しているオレ、リコ、エクレ、レオンミシェリ姫、銀髪少年は重苦しい雰囲気を出していた。しかしそんな思い雰囲気を壊したのは予想外の人物だった。

「セイハが協力してくれるなら30分で済むよ」

シンクの言葉に全員が驚き、視線をシンクに集めた。

「具体的な策は？」

「セイハってリコを抱えるほど力もあるし足も速いでしょ。だからセイハが姫様を抱えて走れば良い」

あまりにも無茶な話に思わずめまいがした。このままシンクを殴っても罰は当たらないだろう。

「30分じゃ無理だ。オレの足でも1時間はかかる」

そう言った瞬間シンク以外の全員に呆れられた気がしたが、そんな事は今は関係ない。みんなの為に本気でどうするか考えないと。

「ならば輝力で走ったらどうでござるか？」

そう言ったのはいつの間にかこの部屋にいた少女だった。

その少女は翡翠石みたいな綺麗な碧色の瞳で、天狐みたいな美しい金色の髪を赤い紐で短く束ね、豊満な体を花柄の薄紫色の和服に身を包んでいた。フロニヤルド出身を証明するように狐みtainな三角形の耳が頭から生えている。

リコ達の言葉から察するに彼女がユツキーなのだろう。

「輝力ってそんなに便利なの？」

さすがに輝力にそこまでの力があつたとは知らず、聞き返して確認を取った。

「この方法は誰でも出来ると言う訳ではないでござるが、セイ八殿ならば出来るやも知れぬ」

「あつ、それなら不可能。　オレはまだ誰にも輝力を教わってないから」

あえて手で大きくバツを作つて輝力を使えないと宣言した。シンクがオーバーに驚いている気がするけど、あとで殴ることで解消するか。

とりあえずオレが輝力を使えないので却下する……けど別に応用するぐらいなら構わないだろうと思つて1つの策を思いついた。完全にオレやシンクの資質に依存する方法だが、この方法ならば間に合うかもしれない。

「シンク、お前が背負つて走れ。　大丈夫、勇者なら輝力を使つて走りぬく事だつて簡単だよ」

「そうだよ、分かった！ぼくが姫様を運ぶよ！」

ま、シンクが馬鹿で助かったよ。　コロツと丸め込みやすいし



そうと決まればオレもストレッチするか。

「勇者殿はそこまで足が速いのでござるか？」

「アスリートとしては平均より下。だけど元気だけは有り余ってるから輝力の強化もそれなりに高いと思うよ。」

それじゃシンク、ミルヒオーレ姫を抱えて。途中まで送る」

狐少女の言葉にシンクの酷評を返して、シンクが落ち込んだ。まあ続いた言葉で元気になったけど。

全員が不思議そうな表情をしたまま、シンクはとりあえずミルヒオーレを背負った。

「それじゃ行くか。朝倉流秘奥義」

「あつ、拙者も送るでござる」

「嵐瞬」

誰かにすそを掴まれた気がしたけど、気のせいだと思って秘奥義を使いシンクを連れ出した。

オレの視界に移る世界は灰になるかのように消えてただ一直線に走る細い道が出来上がった。その道を躊躇いなく進み、進み、進み続ける。

途中で足に激痛が走り、ここが自分の限界だと知った。だけどこんな場所で下手ってなんか居られない。痛みを噛み殺して距離を稼いだ。

走り出してからそんなに時間がかかってないはずなのに堪えていた痛みがついに猛威を振るい、ついにオレは走ることを止めざるを

得なかった。反射的にシンクとミルヒオーレを投げ飛ばしてしまっ  
たが、シンクが無様ながらもちゃんと着地してミルヒオーレを受け  
止めた。

「と、って速ッ！！？」

「驚くのは良いから早く行け。頼みの綱はお前なんだから」

「ッ…分かった。セイハのバトン、ちゃんと受け取ったからね！」

シンクは叫ぶようにそう言い、足に輝力を溜めて走り出した。い  
や、なんか途中でサーフボードを出して飛んで行った。

その速さから考えてミルヒオーレが間に合うのは目に見えている  
…かもしれない。さすがにそこまでは自信がなかった。

「大丈夫でござるか？」

「あれ？ いつの間に来たの？」

不意に現れた狐耳の少女に驚いてしまった。      と言うかここに出  
現するのなんてありえないだが。

「拙者がすそを掴んだの、気付いてなかったでござるか？」

「あゝ、アレって気のせいじゃなかったんだ」

嵐瞬って使ってる最中重たさを感じないから分からないんだよね。  
こんな技を再現した父さんに呆れながら深い嘆息をついた。

「ところで起き上がらないでござるか？」

「上がれるモンなら上がりたい」

オレの言葉に不思議そうに首をかしげて、一瞬で血の気が引いた。どうやらオレの足が目に入っただけらしい。

オレのズボンにはバケツをひっくり返したほどの血で染まり、寝っ転がっている地面にも血の雫を零している。気を抜いたら気絶してしまいそうなくらい激しい激痛が脳に訴えかけて足の感覚はかなり薄い。

「その足は一体どうしたのでござるか！？」

「答えるのが面倒だからパス。ユッキー？もビスコッティに帰ったら？ 多分数時間もしないうちにビスコッティに着くと思うよ」

「そう言えば拙者は自己紹介してなかったでござるな。拙者はオンミツ部隊のユキカゼ・パネトーネでござる。それと怪我人を放置して帰る選択をするほど冷血な人間ではないでござるよ」

「……戦時でその甘さは敗北につながるよ」

何を言っても放置してくれなさそうだったので、ひねくれた言葉を言い放つのが精一杯だった。

どこか嬉しそうな表情をしたユッキーは胸元から医療キット（どうやって入れていたのかは疑問）を取り出して、オレのズボンを足の付け根から引き千切った。

足にある傷も露わになり、普通の4倍近く膨らんだふとももの傷をユッキーは怪訝そうに傷を見る。

「これは、まるで肉離れみたいでござる」

「実際に肉離れだからね。」

さっきの技、嵐瞬っていうんだけど、気を全身に纏うと同時に自分の存在だけ時空間に飛ばして移動するって技なんだ。そのせいでわずかな間だけ時間を巻き戻して走るってこともできるけど、普通の体が時空間なんて移動できるはずもないから走る時に両足に大きな負担をかける。その結果が肉離れなんだ」

嵐瞬の説明をするとユツキーの表情が驚愕で固まった。

まあ気持ちはよく理解できる。オレも父さんに説明された時、常軌を逸しすぎているだろと思った。同時にこんな無茶な技を再現するなとも。

引けない戦いではかなり便利なので一応覚えてみたのだが、普通の肉離れ以上に足が膨らむし、出血で足に激痛が走るしで不便としか言えなかった。

「ならば固定する方がいいでござるな」

ユツキーはそう言って手慣れた様子でテープを張り始めた。しかも規範通りとしか言えないほどに見事な肉離れのテーピングだったので思わずこっちが驚く。

「テーピング出来たんだ……」

「むっ、これでも最低限の応急処置は覚えているでござるよ」

いや、フロニヤルドにテーピングの知識があったことに驚いたんだけど。

そう言いたかったけど、なんか今以上に怒らせそうな気がしたので勘違いをそのままにしておく。

「ただ、この状態なら歩くことは難しそうですね。拙者が背負うでござるよ」

「大丈夫だって。これでも治るのは早い方だし聖剣エクスマキナを杖代わりにすればガレットまで変えることもできるし」

「無茶はいけないうでござるよ」

そう言ってユツキーはオレを背負い、ガレットの方へ歩き出す。

「ちょっと!!自分で歩けるって!!」

「拙者は意地でも背負うつもりでござるからな」

本当にオレを放す気はないと感じ、オレは抵抗することをあきらめた。

そしてユツキーは満足そうに嬉しそうな笑顔を浮かべて走り出す。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4795u/>

---

DOG DAYS 汝等、将成滅天之『破』

2011年10月8日00時41分発行